

今年度は気温が高く推移しているため、今後の急激な環境変化が生育・品質に及ぼす影響が大きくなる可能性があります。

ネット発生前後に低温に遭遇すると、ヒルネットが発生しやすくなります。4～5月上旬は、特に予想最低気温をこまめに確認し、メロンを低温に遭遇させない管理に努めましょう。

1 ヒルネットの発生要因

環境要因： ○ネット発生期の低夜温

○ネット発生期の日中曇雨天条件下の多湿

栽培特性： ○玉直しの遅れ

○ネット発生期の過剰な灌水

○生育初期からネット発生期の強草勢

その他要因： ○品種特性→イバラキングは特に注意が必要。

※ これら要因が、複雑に絡み合いヒルネットの発生につながるため、総合的な対策が必要である。

2 ヒルネット軽減対策

1) ネット発生期の低温を回避する

・低温に備えて、可能な限り内張り、被覆資材を活用して、施設内の最低気温 10℃以上を優先した保温管理に努める。

・低温が予想される前日の午後は、日中の温度を確認しながら、早めにハウス及びトンネルを密閉するなど、夜間の温度確保を優先した管理に努める。

・外張りの破れや扉の隙間の修繕・改善をする。

※事後、晴天による高温が予想される場合は、換気作業に留意する。



15日目から花座部にネット発生



低温処理（夜間 6℃）によって発生したネット形成異常

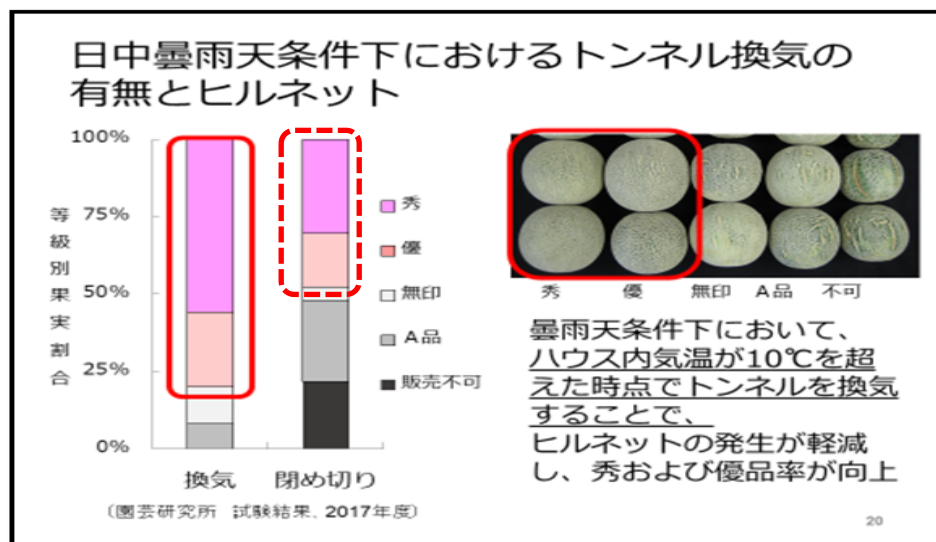
（低夜温に遭遇し、果実の表皮が硬くなり、果皮強度と果実内圧のバランスが崩れることで、大割れする。）

2) ネット発生期（特に日中曇雨天条件下で）は果実周辺を多湿にしない

- ・ ネット発生期は、曇雨天の場合でも、日中温度 10℃程度あれば、トンネルを開けて湿度を下げる。
- ・ ハウス内ハウスサイドはハウス内気温が 15℃程度あれば、ハウス内気温の下がりすぎに注意して換気を行い、湿度を下げる。

【イバラキング 園芸研究所 研究事例】

ネット発生期に曇雨天に遭遇し、日中も多湿になると、夜間だけでなく、日中も果皮が緩まない状態となる。さらに保温のため、内張りやトンネルを日中も被覆してしまうと、果実内圧が高いままの状態が続き、大きく割れる。そのため、できるだけ果実周辺の湿度を抜き、果実内圧を低下させることが重要である。



※その他

○早めの玉直し

- ・ マルチに接している部分がヒルネットになりやすいため、ネット発生前に玉直しを行う。
- ・ 玉座は、ネット発生前に敷き、果実を直立させる。実の座シートでも、果実を早めに直立させる。

○ネット発生前の灌水のやりすぎに注意する。

○適正な草勢を維持する。

- ・ 草勢が強くなりすぎると着果率や花質の低下を招くだけでなく、ヒルネットを助長する
- ・ 換気は30℃を目安に行い、蒸し込みは避ける。
- ・ 着果節位は12～15節を目安に行う。